

TUAD IS HERE

●日常の中の芸工大

〈studioこぐま〉でのキャンドルとクリスマスリース作り。
カラフルなデコレーションで温かなクリスマスを演出しました。

廃校になってしまった、小国町の旧小玉川小学校をアトリエにして活動しているアーティスト集団〈studioこぐま〉。メンバーである、卒業生で元副手の大沼洋美さんと、鈴木淳平さん、原田聖さんの3人は、それぞれの制作の場としてだけでなく、専門である写真のワークショップや大人のデッサン教室を行うなど、芸術活

動を通じた交流や体験の拠点として校舎を活用。芸術と地域との出会いによって生まれるものを探っています。12月には、まつぼっくりやクルミなど地域で採れた植物を使ったクリスマスリース、キャンドルづくりが行われ、地元の親子連れなど多くの人が楽しみました。

WEB 〈studioこぐま〉の活動を詳しく紹介します。



表紙のアート



学生が感じる“山形”を、独自の視点で映像化。
山形のPRの一端を担います。

映像学科では山形県広報課と連携し、演習の中で山形をPRする映像作品を制作しています。様々な視点からとらえられた“山形”は、芋煮、さくらんぼ、出羽三山などおなじみの名物・名所をモチーフにしながらも、斬新な切り口で映像化されています。映像は、山形県インターネット放送局〈やまがたChannel〉や8-gのホームページでも公開しています。

WEB 制作した学生のインタビューはWEBで。

8*gとは

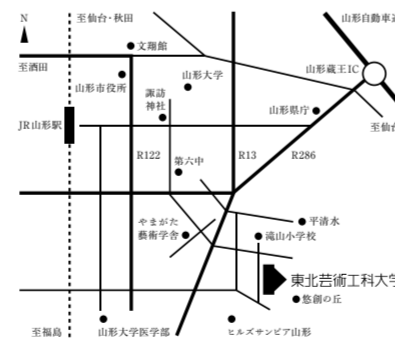
芸工大広報誌のタイトルは「8-g」。最初の「8」は芸工大の8であり、もう一つの「8」は芸術市民の8。文化的志向を持つ皆さんを「芸術市民」と名付けました。あの絵が好き！このデザインがかっこいい！景観がきれい！こんな風に日常の中で感動できる人は立派な芸術市民。そんな芸術市民のみならず芸工大が、「+」より強い「*」で結ばれることで、新しい何かを創り上げていきたい、そんな思いを込めて「8-g」、親しみを込めて「ジー・ジー」と呼んでください。
広報室では、「8-g」を置いていただけるショップやギャラリーなどを随時募集中です。

東北芸術工科大学

【芸術学部】文芸学科、美術史・文化財保存修復学科、歴史遺産学科、美術科〔総合美術/日本画/洋画/版画/彫刻/工芸(漆芸、陶芸、金工)/テキスタイル〕
【デザイン工学部】企画構想学科、プロダクトデザイン学科、建築・環境デザイン学科、グラフィックデザイン学科、映像学科、メディア・コンテンツデザイン学科
【大学院芸術工学研究科】博士後期課程 芸術工学専攻、修士課程 [芸術文化専攻/デザイン工学専攻/デザイン工学専攻 (仙台スクール)]
【研究機関】やまがた芸術学舎 [共創デザイン室/東北復興支援機構TRSO]、東北文化研究センター、文化財保存修復研究センター、こども芸術教育研究センター、デザイン哲学研究所、東アジア芸術文化研究所

8*g オフィシャルサイト <http://gs.tuad.ac.jp/gg/>

大学周辺マップ



東北芸術工科大学広報誌 8-g
2012年1月12日発行
発行：学校法人東北芸術工科大学
〒990-9530 山形県山形市上桜田3-4-5
東北芸術工科大学広報室
TEL: 023-627-2246 FAX: 023-627-2185
URL: <http://www.tuad.ac.jp/>
Email: hello-gg@aga.tuad.ac.jp
©東北芸術工科大学 Printed in Japan 2012
印刷：田宮印刷株式会社

8*g

芸術市民と「ジー・ジー」に創る
芸工大広報誌「ジー・ジー」
Vol.19 WINTER 2012
東北芸術工科大学





芸工大のヨスガ。

地域社会と密接なつながりをもって歩んできた芸工大。人と人、人と場所、物、事象は影響し合い、つながっています。ヨスガ(緑)とは、心惹かれ触れ合う感性から生まれる、未来への確かな手がかりです。学生にとって、大学にとって、社会にとって、これらのヨスガはどんな影響を与えているのでしょうか。2012年の卒展から、地域社会との関わりから、その一端をご紹介します。



2012年度 卒展のテーマは“ヨスガ”。

4年間の学びや出会いの集大成として、また未来へのステップとして、それぞれの思いを持ちながら卒業制作・研究に取り組む学部4年生と大学院2年生。卒展は2012年2月14日から2月19日に開催します。ぜひ会場で、人や社会と触れ合った学生たちが何をヨスガとしたのかを感じてください。

積み重ねた技術と、新しい提案がひとつになる工房。

●渡辺由枝(プロダクトデザイン学科)

卒業制作として、幼児期から成人になるまで使えるユニット式のベッドを制作している渡辺由枝さんのコンセプトは“一生寄り添える家具の提案”。安心感と愛着をもって長く使い続けられるベッドの素材に選んだのは、優しい風合いで耐久性も高く、使い込むほどに美しい色合いになる籐です。制作協力をお願いしたのは、明治40年から創業する老舗で、渡辺さんが幼い頃から慣れ親しんだ籐製品を生み出してきたツルヤ商店。社長の会田源司さんとはお祖母さんの代から付き合いがあり、とても身近な存在だったそうです。渡辺さん

はニスの匂いがする工房の一角、職人が籐を削る音を聞きながら、会田さんの指導を受け作品の完成を目指しました。「実用性だけでなく手作りの付加価値もある日本の籐製品を、若い世代に伝えていけるのはとても嬉しいこと」と語る会田さん。渡辺さんは「世界で認められている技術者が身近にいるのが本当にありがたいです。会田さんは日本の籐製品の良さや技術を広めたいという情熱をもって若い人を受け入れて、一生懸命に応援してくれます。ものづくりに真摯に取り組む姿勢も勉強になりました」と感謝と感激を伝えています。



ひとつの空間を共有する、創作の時間。

●鴻崎正武ゼミ(美術科洋画コース)

美術科洋画コースで鴻崎ゼミに属する学生たちは、ひとつの広いアトリエを共有し、卒業制作に取り組んでいます。自身の作品を「卒展だからこそできる、現代アートのゆるさを皮肉れる作品」と語る古川孝裕さん。「抽象と具象をミックスし、具象物体が浮かび上がるような絵にしたい」という高橋洗平さん。「ありのままの自分をぶつけた」と作品に向かい合う飛嶋翔さん。「テーマである“光”を描けたら」と作品に魂を込めた大内美香さん。「ばらばらの個性がつかぬ立体作品で、その人がその人らしくある必要性を感じてほしい」と、熱

い想いを語る関根可奈子さん。アトリエにはそれぞれの個性や想いが宿り、静かな時間を紡いでいました。鴻崎正武講師は、「こういった経験は、社会に出て何かを表現していく時のアイデンティティに、少なからず影響があるのではないのでしょうか。洋画コースで巡り会い、育んだひと時を糧に生きてほしいですね」と温かな視点で語っています。卒展が始まると、このアトリエはそのまま作品を展示するギャラリーへと変身。鑑賞者は作品そのものだけでなく、学生たちがこの空間で共有した空気も感じ取ることができるかもしれません。

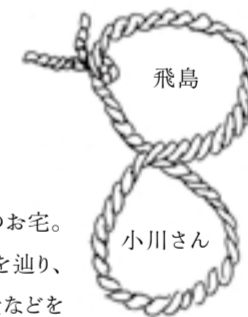


鳥の研究で育んだ、あたたかな心の交流。

●小川ひかり(歴史遺産学科)

酒田港から船にゆられて西に75分の日本海に浮かぶ飛鳥。大学から遠く離れた場所に赴き、そこで暮らす女性たちの歴史や文化を書き起こし「飛鳥の女性史」を卒業論文に選んだ小川ひかりさん。きっかけは1年次に東北文化研究センターが発行する地域ブックレット制作を担当したことでした。飛鳥に暮らす方々との交流を重ね、温かく迎えられるうちに飛鳥に対する思い入れが強くなり、「飛鳥の暮らしや歴史を形にして恩返しをしたい」と思うようになりました。夏場は月に一度、長い時は1ヶ月間滞在し、すっかり鳥の雰囲気にな

染んだ小川さんが必ず訪れるのは、太田キヨコさんのお宅。一緒に温かいコーヒーを飲みながら太田さんの記憶を辿り、漁村ならではの運動会、食文化、活気ある港の風景などを綴っていきました。太田さんは「自分が体験したことを話しているだけで立派なことは言えないけど、来てくれるのが嬉しい。小川さんが1年生の時から知っているからね、娘みたいに思っているよ」と笑顔で語りました。「研究が終わったからといって、もう鳥に來ない、というのが嫌で」という小川さん。卒業後は、飛鳥の会社への就職と移住を決めています。



震災復興からはじまる、新たなつながり。

●吉田雄次(メディア・コンテンツデザイン学科)

東日本大震災からの復興を目的として、復興グッズのセレクトショップ「Send♥ai Reborn Stage」の仙台のいろは横町への出店を提案し、研究として実験的に開店させた吉田雄次さん。復興に向けて多くの人が立ち上がりプロジェクトも進行する中で、被災地にある素材を使い、現地の人たちが持つ技術、意識を尊重した考え方が注目を集めました。昔ながらの風情が残る、いろは横町の店内に並ぶのは、陸前高田市にある高田松原の松材から作ったキーホルダーや、気仙沼市の漁師の網を使ったハンモックなど。吉田さんは、例え復興支援の意識がな

くても、自分が欲しいと思える魅力的な商品ばかりを集めたそうです。また、より多くの売上金を被災地に還元したいという気持ちから、被災地の生産者と直接やり取りすることを心掛けた結果、復興に対する想いを共有するという経験もしました。「制作工程が複雑で市場に出すのが難しい商品も取り扱うことができたのは、沢山の人の共感と助けがあったからです。地域に根ざした商品の魅力を伝え、訪れたお客さんに知ってもらうことが大事だと思っています」。吉田さんは震災復興の一端を担いながら、新たに実感した東北の魅力を発信しています。



産学連携で共に創り出す、未来への“ヨスガ”。

企業や地域と連携し、開学以来、累計400件以上の受託デザイン・研究・プロダクトを行っている芸工大。学生の柔軟な発想、若い感性をプロジェクトチームに組み入れ、担当教授の指導のもと、本格的な事業として地域社会に根ざしています。



共創デザイン室

山形の製造業・建設業・農業・観光などの振興を、東北芸術工科大学のデザイン力・企画力・若い力でサポートする、産業界と大学の連携窓口兼ショールームです。マネジメントスキルを持った大学職員が常駐し、訪れた市民とともに、デザインによる産業振興について語り合い、行動する地域デザインの実験室です。

共創デザイン室では、3体系の連携体系の中から企業や自治体側のニーズに合うものを選んで、プロジェクトを進めています。

1. カリキュラム型
内容:授業に組み込み研究を行う豊富なアイデア展開/期間:数ヶ月~1年/学生:受講学生/書類形式:研究業務委託契約書
○産学共創プロジェクト(PD学科一部科目)
2. プロジェクト型
内容:内容に合わせて形式をとる/期間:別途相談/学生:教員によるメンバー構築、希望参加学生など/書類形式:研究業務委託契約書
○個別プロジェクト形式、ワークショップ形式、コンペ形式
3. プロフェッショナル型
内容:教員が主体で研究を行うプロ品質の提案/期間:別途相談/学生:学生アルバイト/書類形式:研究業務委託契約書

戸塚山古墳群発掘調査

●北野博司准教授+学生(歴史遺産学科)

地域特性に沿った文化遺産を守る文化財保存修復センターの事業のひとつとして、米沢市の戸塚山古墳群発掘調査を進めています。市の史跡である古墳群の全体像を把握し、国の指定史跡として整備を進めるための調査です。ここは飛鳥時代の古墳が約200基も集まる、東日本でも非常に珍しい地帯。2011年度は歴史遺産学科の北野博司准教授と約10名の学生が参加し、発掘作業を実施しました。今後も出土品の整理・計測から報告書の制作まで一貫して行っています。

本田技研研究所×除雪機「Little Peter」

●上原勲准教授+学生(プロダクトデザイン学科)

企業側の開発者やデザイナーが課題を出し、学生と共に開発に取り組んでいく「産学共創プロジェクト」で開発したのは、汎用エンジンを使用した「Little Peter」という除雪機。女性がひとりでも楽に使える軽さとコンパクトに収納できるスマートさなどが公開プレゼンテーションの中で評価され、実際にモデル制作を行いました。「役に立つ道具を作る」という今回のテーマに対し実験を持って発案するため、授業の中で宮城県の被災地でのボランティア活動を経験し開発にあたりました。

農産物直売所「スイカドーム」

●松田道雄教授+学生(美術科総合美術コース)

尾花沢市にある農産物直売所(未知の駅・のり蔵)は発泡スチロール製のドーム型テナント。そのリニューアルとして、地域とアートの関わりに積極的な学生たちが現地に入り、2日間にわたりドームの外壁をスイカ柄にペインティングしました。スイカの縦縞は、東北6県や尾花沢市の形になっていて、震災復興を願う「東北はつながっている」という思いが込められています。「スイカドーム」の中で販売されるスイカの出荷用ダンボールのデザインも学生が手がけています。

学生視点で魅力を発信「Yamagata 50」

●松村茂教授+学生(企画構想学科)

山形県とデザイン工学部企画構想学科が連携し、県外の若者に対し学生の視点から山形の魅力を伝え、県内への移住交流推進を図るホームページ「Yamagata 50(ごえん)」を企画・運営・管理をしています。取材や編集をするのは全て学生。食べ物、温泉、ショッピング、観光スポットなどのコンテンツは、山形に住む学生ならではの山形の新しい魅力を伝える充実したものになっていて、TwitterやFacebookなどのSNSも活用。オンタイムで山形と人を結びつけるサイトになっています。

「Y-RE: C」のリサイクルツール

●上原勲准教授(プロダクトデザイン学科)

1年間に4万台もの自動車が廃車になっている現状を考え、これまでリサイクルされにくかった、ハンドル、シートベルト、エアバッグなどを有効に使ったツールを開発しました。連携したのは、山形県自動車販売店リサイクルセンターとNPO法人山形県自動車公益センター、共創デザイン室長を務める上原勲教授。ツールは「Y-RE: C」(ワイ・レック)というブランド名で市販される予定です。また、被災地の廃車を利用し利益を地域に還元する、復興支援策としても検討されています。

山形市の観光物をラッピングトラックでPR

●中山ダイスケ教授+学生(グラフィックデザイン学科)

山形市の委託を受け、山形市の名物をトラックの側面にデザインし山形のPRを行う企画「山形市トラック観光大使プロジェクト」が実施されました。大型トラックにラッピングされたのは、「山寺」「蔵王温泉スキー場」「さくらんぼ」「日本一の芋煮会フェスティバル」「山形花笠まつり」の5つ。学生が提案した作品はいずれも秀作で、市民審査委員、本学の中山ダイスケ教授らに選出に苦労したといいます。トラックは7月に出発式が行われ、5年間にわたり全国各地を駆け巡ります。

気仙沼復興支援プロジェクト

●竹内昌義教授、他教授陣+学生(建築・環境デザイン学科)

建築・環境デザイン学科では、東日本大震災で被災した気仙沼市唐桑町の復興支援と高台移転のプロジェクトに取り組んでいます。この地区は津波で集落全体が流され、地区の高台移転が決定しています。学科では「自然エネルギーを中心とした新しい集落のかたち」とテーマを決め、自然エネルギーを中心としたエネルギーの転換と産業振興や、コミュニティを維持した新しい集落のかたち、東北の風景を取り戻す活動の実施などのモデルの提示と実践を、3年計画で進めています。

清福時薬師堂

●早野由美恵准教授(プロダクトデザイン学科)+学生(日本画コース)

埼玉県清福時薬師堂のデザインを早野由美恵准教授が請け、内装装飾の一部を日本画コースの学生が担当しました。「お寺に訪れた方々に心の安らぎを得て頂きたい」というご住職などの希望に併せて、高さ約1mのステンドグラス風の絵画を12枚制作。自動車ガラスの中間膜を再利用した新開発の絵具で、薬師如来を取り囲む12神将を12の干支に置き換えて描きました。学生たちは埼玉で作画中に3.11に被災。東北の被災者に思いを馳せ、無事を祈りながら仕上げた作品となりました。

山形駅東口クリスマスイルミネーション

●小林泰彦教授+小林秀幹講師+学生(美術科工芸コース)

美術科工芸コースでは、山形駅前大通り商店街振興組合の協力で、駅前大通り中央分離帯に設置するクリスマスイルミネーションを制作。東口のロータリーに設置した2010年度に引き続き、2011年度は1年生8名が授業課題として動物のイルミネーションを2ヶ月間かけて制作し、作品数点を設置しました。今回の作品は、他にも東北中央病院と浜井電球工業株式会社山形営業所にも設置されました。なお、使用しているLEDは浜井電球工業株式会社よりご提供いただいています。

山形版、サステナブル・ライフスタイル 絵巻

●坂東慶一准教授+卒業生(グラフィックデザイン学科)

人と環境にやさしい持続可能な社会をつくるために、これから目指すべき生活の様子を絵で記したサステナブル・ライフスタイル絵巻。第2回サステナブルデザイン国際会議がとりまとめた全国版の絵巻をベースに、山形の自然や歴史、風土を反映した山形版のサステナブル・ライフスタイル絵巻を作成しました。庄内町の風力発電や金山町の木材を使った住宅、山形エコハウスなど、山形独自の取り組みが随所に盛り込まれ、サステナブルな生活が身近に感じられるものになっています。

秋田杉間伐材でのモニュメント制作

●学生(美術科彫刻コース)

学生が秋田県田代町で調査をした事がきっかけとなり、美術科彫刻コースでは毎年9月上旬に、秋田杉の間伐材を使ったモニュメント制作を実施しています。間伐材の枝打ちやチェーンソー体験から始まり、現在は有志学生による活動として約15名が参加。営林署の方に用意して頂いた間伐材を使い、かたまえ山公園の(森の学校)で合宿しながらモニュメントやベンチなどを制作しています。完成した作品は田沢湖の展望台に続く道にコレクションとして展示されています。

山形の農産物PR、地産地消を支援

●中山ダイスケ教授+学生(グラフィックデザイン学科)

JAビルの立体駐車場の西側のスペースを、農産物イベント広場として活用しようという試み。「ば〜くば〜く」という名称は、口を大きく開けて「パクパク」食べること、駐車場の「パーキング」、公園の「パーク」を由来に命名し、ロゴマークをデザインしました。また、地産地消ファン作り運動のシンボルキャラクターとして「け〜たん」を作成。地産地消協力店のぼりやガイドブックの中で、親しみを込めて「山形産の新鮮な食材を、山形でおいしく食べてください」と呼びかけています。

仙台の中古マンションをリノベーション

●馬場正尊准教授+学生(建築・環境デザイン学科)

都市部であるほど需要が高まっているリノベーション。仙台市の中心街、本町にある中古マンションのリノベーションを、仙台の住宅メーカー・デザインホームと建築・環境デザイン領域で連携、共同開発を行いました。3年程の実績がある山形R不動産の特色ある取り組みから、学生の自由な発想に期待を寄せたデザインホーム。学生たちとまとめた5つのプランのコンセプトや間取りをweb上で掲載し、人気投票で1位になったプランを実際に施工するという実験的な企画を行いました。

塩田行屋 * 文化財保存修復 石井センター



地域の文化遺産を保存する活動に加えて、継承できる体制を作り出しています。

地域に存在する文化財とその価値を、その地域の方に知っていただく。地域密着の体制で住民や行政と連携し、実践的な活動を進めています。



上: 清掃と応急処置を行った、お堂の中の仏像群。「献身的に作業してくれた芸工大の方々には感謝感激です」と語るのは、代々管理を務めてきた渋谷さん。左下: 文化財保存修復研究センター長の長坂一郎教授が行った、町指定文化財についての講演にも多くの聴講者が。右下: 「白鷹町の仏像展 塩田行屋の仏たち」展には県内外から人が訪れ、白鷹の仏像について広く知られる機会になりました。

文化財保存修復研究センターでは、白鷹町文化交流センター(あゆむ)より受託調査の依頼を受け、仏像の写真撮影記録と制作年代の調査を、長坂一郎センター長と岡田靖講師を中心に実施しました。対象となったのは、白鷹町指定文化財の仏像などが安置される塩田行屋で、かつて修行僧や修験者などが行をしていた場所。センターの研究員に加え、美術史・文化財保存修復学科の学生、大学院生、卒業生による体制で、文化遺産を所有・管理している地域の方々と連携した地域密着型の実践を行いました。

昭和5年に廃寺になり、所有者の高齢化で管理が止まっていた塩田行屋は、調査に入った時、お堂の仏像は埃がかぶり虫害も見られた状態。現地で掃除と応急処置を行った、美術史・文化財保存修復学科4年の齊藤友佳理さんは、「今回の処置で10年程は現状が保てますが、所有者は既に高齢です。このままではまた同じ状態になってしまうのでは」と不安を口にします。岡田靖講師は「文化財と指定するだけで管理や援助がない現状では、掃除などの簡単なことでも継続は難しい。代々管理して来たという理由で、昔のように若い世代に管理を求めるのは無理ですし、この状態は全国で見られています」と、地方の文化財が抱える問題点を指摘しました。また、調査に参加した大学院生1年の石井紀子さんは「東北の歴史を知る人から、聞き伝えができる最後の時期が来ています。失われる前に手を尽くしたい」と、危機感をにじませました。今回の調査では、安置されている明治期の仏像の大半が、山形市出身で近代彫刻の大家である新海竹太郎の父、新海宗慶の制作であることが確認され、その中の木造如意輪観音坐像の台座部分には新海竹太郎の銘も発見。歴史の空白の一部分が埋まったと言えるそうです。また、卒業生である宮本晶朗さんが学芸員を務める(あゆむ)では、この木造如意輪観音坐像などを中心に展示した「白鷹町の仏像展 塩田行屋の仏たち」展を開催。1,000人以上の来場者を迎え好評を博しました。「まず地域に存在する文化財を知ってもらうこと。そして保存活動の現状や、センター、学科の取り組みも知ってもらいながら、地域の人と行政、専門家が多角的に連携を進める必要があります」と岡田先生は語ります。この活動は、今後文部科学省の戦略的研究基盤形成支援事業として継続する予定で、モデルケースとして全国に広がっていくことに期待を寄せています。

WEB 管理者の渋谷さんのお話を紹介しています。



美術史・文化財保存修復学科

人間が作り上げてきた芸術作品を理解し、文化全体の知識を学ぶ美術史の分野、作品の状態を見極め、修復方法と考え方を学ぶ立体修復と平面修復の分野、文化財の保存方法の研究を行う保存科学の4分野に取組むことができます。



右から、渡邊英さん、酒井聡さん、西澤高男准教授。紅葉とライトアップで趣きを変え、円通院石庭「雲外天地の庭」で。

渡邊英 Hana Watanabe / 大学院仙台スクール2年生。社会人としてグラフィックデザイナー時代に円通院のポスター制作をしていたことをきっかけに、副住職の天野晴華さんと親交を深め、ライトアップのコーディネーター、図面おこしからセッティングまでを手がける。

酒井聡 So Sakai / 仙台高等専門学校情報デザイン学科兼建築デザイン学科助教、博士(芸術工学)。プロダクトデザイン学科卒業後、大学院で博士(芸術工学)取得。在学中、音響による空間演出、音響と光が共調する空間演出デザインに取り組む。現在も創作研究活動を行っている。

西澤高男准教授 Nishizawa Takao / 東北芸術工科大学プロダクトデザイン学科准教授、一級建築士、メディアアーティスト。空間を媒体とした作品を、建築とメディアアート双方からのアプローチによって製作している。建築計画事務所(ビルディングランドスケープ)、およびメディアアートユニット(Responsive Environment)共同主催。

観光名所・松島で、院生、卒業生、教授が協力し、幻想的な秋の空間を創出しました。

大学院仙台スクールで学ぶ渡邊英さんは、宮城県松島町にある円通院や瑞巖寺などで開催された「松島紅葉ライトアップ2011-希望、灯す。」のひとつ、円通院庭園の紅葉ライトアップのコーディネーターとしてイベントを支えています。円通院の美しい庭園をさらに幻想的に魅せるこのイベントでは、光と音のインスタレーションも同時に開催されました。荘厳な歴史の面影を残す庭園の奥に位置する「禅林瞑想の庭」に歩みを進めると、秋風に揺れる木々の囁きや楽器の演奏に反応して、光の瞬きが波のように広がる幽玄の世界が来訪者を迎えます。蛍火を思わせる繊細なフィラメントの灯りを使い空間演出をしたのは、西澤高男准教授と、大学院博士後期課程修士で仙台高等専門学校に勤務する酒井聡さん。大学院生、修了生、教授が一堂に会し創り上げたプロジェクトとなりました。「インスタレーションを行った場所は、紅葉しない杉木立に囲まれているのでお客さんが足早に過ぎていってしまうという問題がありました。そこで、自然に近いほのかな光の明滅で庭の興行きや存在感を際立たせ、場所の特徴が明らかになる灯りを考えました」という西澤准教授。明るいだけのライトアップではなく、訪れた人が足を止めて心穏やかな時間を過ごせる空間を演出しました。期間中はギターや

ピアノの生演奏もあり、合間には現代音楽やクラシック、エレクトロニカなど庭園の雰囲気や耳でも楽しめます。選曲した酒井さんは「ライブ感ある生演奏も人気でしたが、音と光だけが存在する空間でその美しさを堪能するのも良かった、という声も寄せられました」と、インスタレーションの手応えを感じています。渡邊さんは、円通院とインスタレーションチームのパイプ役となりスケジュールの進行調整を行ったほか、グラフィックデザイナーの経験を活かしてのポスター制作やライティングなど幅広く担当。「観光に興味があり、広告について大学院で本格的に学んでみたいという意識で入学しましたが、まさかここまで深く観光地に関わるとは思っていませんでした。西澤先生や酒井さん、円通院の副住職をはじめとして、人とのつながりも思った以上に広がりました。大学院には行ってみるものだな、と実感しています」と、あっけらかんとした笑顔を見せた渡邊さん。そんな渡邊さんに対して西澤准教授は「とにかく現場に入り込んで、とことん付き合うというスタンスや、誰にでもはつきりと意見を言える点で誰からも信頼が厚い。彼女がいなければイベントは成功しなかったでしょうね」と渡邊さんを高く評価しています。

WEB 円通院と渡邊さんらの関わりを紹介します。

芸生とOB * 教授

院生、修了生、教授が集結。松島紅葉ライトアップが希望を灯す。



大学院仙台スクール

大学院仙台スクールは東北の豊かな風土の中、実践経験豊富なコンテンツとビジネスの牽引者を教授陣として迎え、「コンテンツ・プロデュース」「ビジネス・プロデュース」の両分野から実践的な教育を展開し、日本のコンテンツ・ビジネスをリードする人材を育成しています。

